

都電荒川線

殺人事件

A Murder on

The Toden Arakawa Line

連作推理小説

Kyotaro

西村京太郎

Nishimura

KOBUNSHA BINKO



光文社文庫



光文社文庫

連作推理小説

都電荒川線殺人事件

著者 ^{にし}西 ^{むら}村 ^{きょう}京 ^た太 ^{ろう}郎

1988年6月20日 初版1刷発行

1992年5月10日 27刷発行

発行者 大 坪 昌 夫

印刷 凸 版 印 刷

製本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(3942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Kyōtarō Nishimura 1988

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70750-5 Printed in Japan

光文社文庫

連作推理小説

都電荒川線殺人事件

目次

第一話	都電荒川線殺人事件	5
第二話	十和田南への旅 とわだ	72
第三話	四国情死行	138
第四話	宮崎へのラブレター	192
第五話	湯煙の中の殺意	247
第六話	祇園 ぎおん の女	314
第七話	サロベツ原野で死んだ女	370
第八話	白樺心中行	424
解説	清原康正 きよはらやすまさ	491

第一話 都電荒川線殺人事件

1

「君は、どこから通っているんだったかな？」

雑誌『旅窓』の田島編集長が、突然、記者の青木亜木子にきいた。

「え？ 何です？ それ」と、亜木子はきき返した。

時々、この編集長は、妙なことをきく。

「四谷三丁目から通ってますけど、それが、何かあるんですか？」

亜木子が重ねてきくと、編集長は、「四谷三丁目か」と、つまらなさそうにいった。

「誰か、荒川あらかわのほうから、通って来ている者はいないかね？」

と編集長は、他の社員の顔を見まわした。

誰も、手をあげない。

「荒川って、何のことですか？」

亜木子が気になって、編集長を見た。

「都電の荒川線というのを知っているかい？」

「ええ。東京で、唯一ただ一つ残っている都電でしょう。一度、乗ってみたいと思っていたんですけど、それが、どうかしたんですか？」

「私宛あてに、投書があったんだ。荒川に住む女性からだね。これだが、読んでごらん」

編集長は、白い封筒を、亜木子のほうに投なげてよこした。

へ都電の荒川線というのを、ご存じですか。今、東京に残っている唯一の都電で、荒川から、早稲田わせだまで走っています。私は、この都電で会社へ通っているのですが、毎朝八時半頃、町屋まちや駅前から乗ってくる若いご夫婦のことで、お手紙を差しあげました。名前は知りませんが、どちらも二十七、八歳の方で、ご主人のほうは、眼が不自由なのです。それでいつも、若くてきれいな奥さんが、つき添って乗って来られるのです。その奥さんのご主人に対する献身ぶりが、他所ほかから見ていて、とても美しく、さわやかなのです。

お二人は、大塚駅前で降りますから、きっと、その近くで働いていらっしゃるんだと思います。

眼の不自由なご主人のほうも、いつもニコニコしていて、卑屈なところは、全くありません。

私は、終点の三ノ輪みわから乗って行くのですが、そのご夫婦とは、同じ時間帯に乗るのでよ

くご一緒するのです。他の乗客も、そのご夫婦のことはよく知っていて、ご主人のほうに席をすすめます。

先日、奥さんのほうがそのお礼だといって、いつも顔を合わせる乗客の人たちに、小さな人形をくださいました。そのときに、奥さんが、趣味で人形を作っていることをうかがったのです。

私は一度、眼をつぶって乗ってみたことがあります。不安で仕方がありませんでした。外が見えないことは、こんなに怖いのかと思いました。

おたくの雑誌は、北の端とか、南の端への旅という企画をよくなさいます。それはそれで、楽しく読ませていただいています。あのご夫婦にとって、毎日毎日の荒川線での通勤は、大変な旅なのではないかと思ひます。ぜひ、あのご夫婦と、荒川線のことを取りあげてくださいませんか。

K子

署名は、アルファベットになっていた。

消印が、三ノ輪郵便局になっているから、三ノ輪から乗っているというのは、本当なのだろう。

「それを、取材してみてくれないか。たまには、東京の街中^{なか}を走る電車というのもいいんじゃないかと思つてね」

と、編集長がいった。

「夫婦の愛の物語というわけですね」

「だから、女の君のほうがいいと思ったんだ。それに、一日だけの取材じゃなくて四、五日、荒川線に乗って、その夫婦の様子や、いつも一緒に乗っている乗客たちのことも取材してほしいんだ。それに、荒川線そのものの取材もね。それで、荒川線を通っている人間がいれば、一番いいなと思ったんだがね」

「大学時代の友だちに、確か、南千住みなみせんじゆのほうに住んでいるのがいますから、四、五日、彼女のところ泊めてもらって、荒川線を使って出社してみますわ。ただ、出社がいつもより遅くなりますけど」

「それは構わんさ。取材だからね。心あたたまる記事にしてくれよ」

と、編集長はいつてから、

「君も早く、いい旦那さんを見つけるんだな」

と、余計なことをいった。

2

卒業名簿で、南千住に住む友人は、すぐわかった。
友井ともいかずこ。通称、カズである。

電話すると、都合のいいことに、一カ月前まで姉と二人でマンションに住んでいたのだが、その姉が結婚して出て行き、今は一人だという。

早速、その日の夜、国鉄、南千住駅近くのマンションに出かけて行った。

去年の十月にあった同窓会で会っているから、約半年ぶりである。

近所から、にぎり寿司とビールをとり、乾杯した。

「カズは、確か池袋の会社に勤めてるんだったわね」

亜木子がいうと、かずこは、少しアルコールのまわった顔で、

「典型的なOLよ。アキみたいな仕事で、羨ましいわ。少なくとも、退屈しないでしょ？」

「でも、いつ潰れるかわからないわ」

「潰れたら、結婚すればいいじゃないの」

「結婚もねえ」

「アキは、独身主義？」

「そうじゃないけど、一生、一人の人にしばらくられるのも嫌だし——」

亜木子がいうと、かずこはクスクス笑って、

「そんなアキが、美しい夫婦愛の取材をするわけ？」

「そうなのよ」

「でも、私は、信じないな」

と、かずこはいった。

「何を？」

「美談みたいなものは、信じてないの。その奥さんは、一生、ご主人の眼になっていくんでしょ？ そんなしんどいこと、私には、できないわ」

「愛し合ってれば、できるんじゃないの？」

「どうか。そんな愛なんて、今の世の中にあるのかしら？　きっと、その奥さんは、ブスなんじゃないの？」

「手紙には、若くて、きれいな奥さんだと、書いてあるわよ」

「ふーん。きっと、その旦那が、億万長者かなんだわ」

「億万長者が、都電で通うかしら？　高級車を乗りまわすんじゃないの」と、亜木子は笑った。

かずこはいい女なのだが、昔から、口が悪かった。それが、変わっていかないらしい。

翌朝、地下鉄で出勤するというかずこと別れて、亜木子は、都電荒川線の三ノ輪停留所まで、歩いて行った。

典型的な下町の商店街を抜けて行くと、停留所がある。

だいたい色の車体が、妙になつかしかった。都電によく乗ったのは、中学時代だったろうか。地下鉄は、早くていいのだが、景色が見えなくて、つまらない。

その点、市街を走る都電は、街の景色を見ながら走るの、楽しい。

赤字と聞いていたが、通勤時間のせい、車内は混んでいた。

亜木子の乗った都電は、ごとごと、下町の街を走り出した。

手紙の主のK子も、この三ノ輪から乗ると書いてあったと思い、吊り皮につかまって、車内を見まわした。

若いOLらしい姿も、何人か乗っている。

だが、その中の誰がK子なのか、わからない。

荒川区役所前、荒川二丁目、荒川七丁目と停車して、手紙にあった町屋駅前に着いた。

時間は、ちょうど八時半である。

もし、手紙にあった夫婦が乗って来なかったら、ここで降りて、待ってみようかと思ったのだが、窓から短いホームを見ると、それらしい二人の姿が視野に入った。

都電らしく、ホームの傍まで商店街が迫っていて、中華そばのれんや、酒店の看板が、すれすれに顔をのぞかせている。

遠慮がちに、細長く作られたホームに、二十七、八歳の男女がいた。

男のほうは濃い目のサングラスをかけ、右手に、白い杖を持っている。女は、細面おもての美しい顔立ちで、男の左手を取り、何か小声でいっている。電車が来たから、気をつけてとでもいっているのだろう。

すがすがしい感じのカップルだった。

二人が乗ってくると、顔なじみらしい五、六人が「お早う」と声をかけ、一人が座席をあけた。

「ありがとうございます」

と、女のほうが丁寧に礼をいい、男も、

「どうもすみません」

と頭を下げて、腰を下ろした。

亜木子は、小型のミノックスカメラで、その光景を何枚か、写真に撮^とった。確かに、下町らしい人情の感じられる風景だった。

二人は、そこから十七つ目の大塚駅前で、降りて行った。

3

亜木子は、出社するとすぐ写真を現像して、編集長に見せた。

「ごくろうさん」

と、編集長は十五枚の写真を見ていたが、

「なかなか美人じゃないか」

「ええ、男の人も、いい顔ですわ。お似合いの夫婦に見えました」

「この夫婦は、何をやってるんだろう？」

「なんでも、ご主人のほうは、大塚で指圧の仕事をなさっていて、奥さんは、町屋で小さな薬局をやっているんですって」

「すると、奥さんは、朝、ご主人を大塚まで送って行って、帰ってから、店を開けるわけか」
「ええ。夕方になると、また、大塚までご主人を迎えに行くらしいんです」

「いいねえ。素敵なお夫婦愛じゃないか。明日は、大塚での旦那の仕事ぶり、町屋の薬局のほうも取材してきてほしいな。名前、年齢、それから、二人がどうやって、知り合ったかもだ」
「わかりましたわ」

「荒川線のほうは、どうだったね？」

「久しぶりに都電に乗って、楽しかったですわ。十年以上も前に乗っただけでしたから」

「そういえば、おれも、長いこと都電に乗っていないなあ。なぜ、荒川線だけ残ったんだろ？」

「乗ってみて、わかりましたわ。あの線は、街中を走りますけど、八割ぐらいが、道路の中を走るんじゃないくて、専用の線路なんです。だから、車の邪魔にならないし、代わりにバスを走らせると、その線路を舗装しなければならぬからだと思いますわ」

翌朝も、亜木子はカメラを持って、同じ時刻に三ノ輪から荒川線の都電に乗った。

昨日と同じ顔が、何人かいる。

亜木子が中学生時代に乗った都電には、確か車掌さんがいて、中で切符を売っていたのだが、今はワンマンカーである。

ごとごとという音が、妙になつかしい。

三ノ輪から、その夫婦の乗る町屋駅前までは、専用線路でなくて、一般の車と一緒に道路の

上を走る。大型トラックが、窓の外すれすれに走っていたりすると、いっそう、昔の都電らしかった。

町屋駅前に着くと、停留所に、あの夫婦の顔が見えた。

しかし、今日は、眼の不自由な男だけが乗って来た。

女のほうは、顔見知りの乗客たちに向かって、

「今日は、私は用がありますので、主人をお願いします。いつものように、大塚駅前で降りますから」

といい、

「お願いします」

と、頭を下げた。

いわれた乗客たちは、下町の人間らしく、

「いいよ、いいよ。引き受けたよ。大塚駅前で、降りしてあげるよ」と、一斉にいった。

「おれが、大塚駅前で降りるから、診療所まで連れて行ってやるよ」

中年の男の乗客が、大きな声で叫んだ。

電車が発車すると、女は、深々と頭を下げた。

都電は、また、ごとごとと走り出した。

「浅井あさいさんとこのかみさんは、いつ見ても美人だなあ」

と、乗客の一人がいう。

どうやら、あの夫婦は浅井というらしい。

「指圧って、本当にきくのかねえ」

「ききますよ。一度、大塚の診療所へ来てください」

「奥さんとは、見合いかい？」

「ええ。まあ」

「浅井さんとは、子供はいないのかい？」

「ほしいんですが、まだ、できません」

車内の一角で、そんな会話が始まった。それを聞いて太ったおばさんが、顔を突っ込んで、どこそこの神社へお参りすれば、必ず子宝に恵まれますよと、チエを授けている。

亜木子は、ニコニコしながら、彼らの会話をきいていた。みんな、心から眼の不自由な浅井という男のことを心配しているのがわかる。

電車が、大塚駅前に近づいた。

さっき、町屋駅前で、奥さんに請け合った中年の男が、

「次だよ」

と浅井にいい、手を引いて、立ち上がらせた。

亜木子もここで降りて、浅井の診療所へ行ってみることにした。

ふいに、浅井が、「うッ」と、呻うめき声をあげて、その場にくずれた。